

病院施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富山県富山市

上野井田遺跡

1998年7月

富山市教育委員会

例 言

1. 本書は、富山県富山市二俣406番の1に所在する上野井田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、病院施設建設工事に伴い、田中耳鼻咽喉科医院の依頼を受けて実施された。
3. 調査は、富山市教育委員会が主体となっており、調査にあたっては、山武考古学研究所が富山市教育委員会の指導のもとに実施した。調査期間・調査面積・調査担当者は下記の通りである。

確認調査	調査期間	平成9年(1997)9月25・28日
	調査面積	78.8㎡(対象面積 942㎡)
	調査担当者	富山市教育委員会生涯学習課 近藤顕子
本調査	調査期間	平成10年(1998)4月12日～同年4月27日
	調査面積	340㎡
	調査担当者	富山市教育委員会生涯学習課 近藤顕子 山武考古学研究所 平岡和夫 桐谷優 長井正欣 間宮正光

4. 整理調査及び本書の編集は山武考古学研究所において間宮が担当し、江口弘子の協力を得た。
5. 本書の執筆分担は次の通りである。Ⅰ 近藤顕子 Ⅱ～Ⅵ 間宮正光
6. 調査により得られた資料は、全て富山市教育委員会が保管している。
7. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで下記の諸氏・諸機関にご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表するものである。(敬称略・順不同)

田中裕之 山口辰一 折原洋一 小村正之 荒井英樹 有山径世 作田尚穂 湯原勝美 日沖剛史
開華亭 花崎工業(株) 開成測量(株) (有)新成田統合社 (株)東日本重機 (株)日本テクニカルセンター

8. 調査参加者は下記の通りである。(順不同)

谷川誠一 政木友和 小林佐代子 長谷川つじ 長井禮子 後美佐子 坂口なみ子 田中愛子

目 次

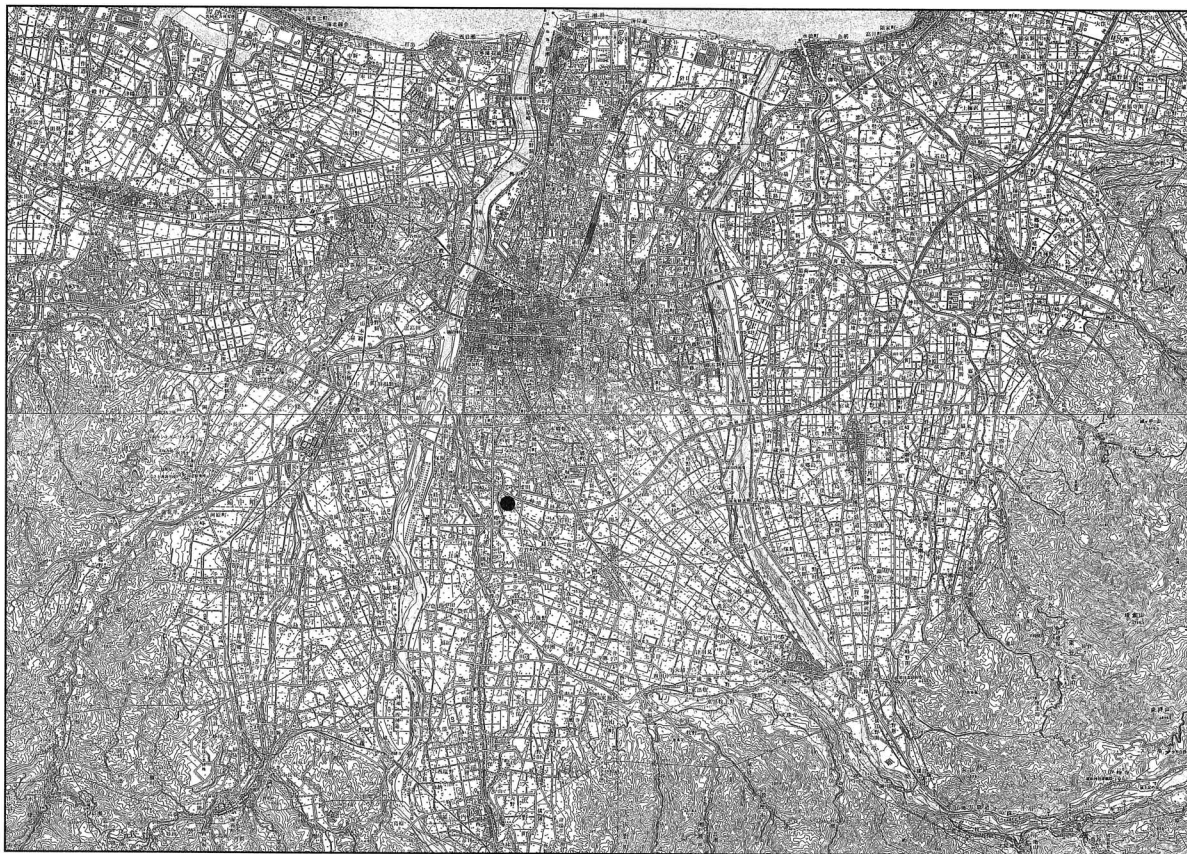
例 言

Ⅰ 調査に至る経緯	1
Ⅱ 遺跡の位置と周辺の主な遺跡	1
Ⅲ 調査の方法と経過	3
Ⅳ 基本層序	3
Ⅴ 遺構と遺物	
A 遺構	5
B 遺物	9
Ⅵ まとめ	12

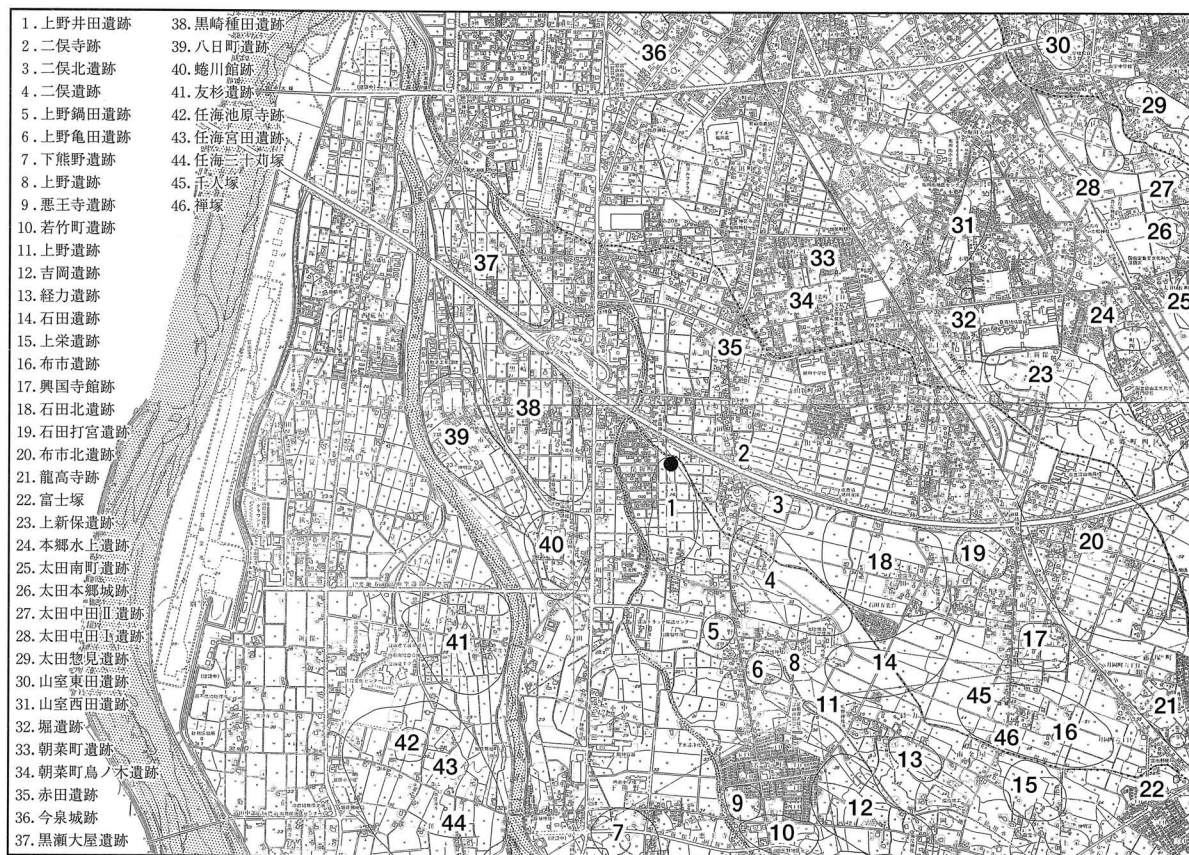
報告書抄録

挿図目次

第1図 上野井田遺跡位置図	第7図 SB-1、SK-1～5、SD-1～3	7・8
第2図 上野井田遺跡と周辺の遺跡	第8図 S I - 1出土遺物	9
第3図 調査区の位置と周辺の地形	第9図 SD-2、SK-2・5、表採・ 包含層出土遺物	10
第4図 基本層序概念図	抄録図 遺跡の位置	
第5図 調査区全体図		4
第6図 S I - 1		4



第1図 上野井田遺跡位置図(1:200,000)国土地理院作製5万分の1『富山』『魚津』『八尾』『五百石』を縮小



第2図 上野井田遺跡と周辺の遺跡(1:40,000)富山市教育委員会発行『富山市遺跡地図』を縮小

I 調査に至る経緯

上野井田遺跡は、富山市教育委員会の実施した市内分布調査の結果発見され、平成5年遺跡地図に掲載された。今回調査の対象となった区域は遺跡の北部に位置し、地目は水田であった。平成9年6月、田中病院（院長 田中裕之）より富山市二俣地内の病院施設建設計画に先立ち、埋蔵文化財の所在について確認の依頼があった。これに対し本委員会は建設予定地492㎡は遺跡範囲に該当する為試掘調査が必要と回答し、協議のうえ試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成9年9月25日に行った。調査の結果、建設予定地の全体に遺跡の広がりを認め、主に平安時代の集落跡であることが判った。遺構には平安時代の溝・柱穴・土坑などが確認され、須恵器・土師器が多く出土した。少量であるが縄文時代後期の土器、古墳時代・奈良時代の土師器等の遺物が出土した。この調査結果を受けて、施工主と本委員会で埋蔵文化財範囲の保護措置について協議を行い、病院建設予定地のうち、建物部分にかかる区域340㎡について発掘調査を実施することになった。

調査は富山市教育委員会が調査主体となり、その指導のもと山武考古学研究所（所長 平岡和夫）が実施することで合意し、平成10年2月、田中病院との間で協定が締結された。調査は平成10年4月12日から27日まで実施し、4月28日付けで調査区の引渡しを完了した。その後、引き続き5月30日まで出土品調査を行った。

II 遺跡の位置と周辺の主な遺跡

上野井田遺跡は、富山市二俣地内に所在する約12万㎡の範囲で、土師器・須恵器が散布している為、遺跡の埋蔵が想定されてきたが、今回の調査で、奈良・平安時代を主体とした遺跡であることが明らかとなった。

富山市を地形的に見ると、県中央部を南北に走る標高76m前後の呉羽丘陵と、立山連峰・飛騨高地を源として富山湾に注ぐ常願寺川と神通川に形成された複合扇状地に大別される。このうち二俣周辺は、神通川の右岸にあたり、遺跡は神通川の支流である土川と二俣川に挟まれた標高23m程の扇状地上に立地する。

大小の水系を集める水豊かな富山市は、人の営みには適していたようで、数多くの遺跡が確認される。

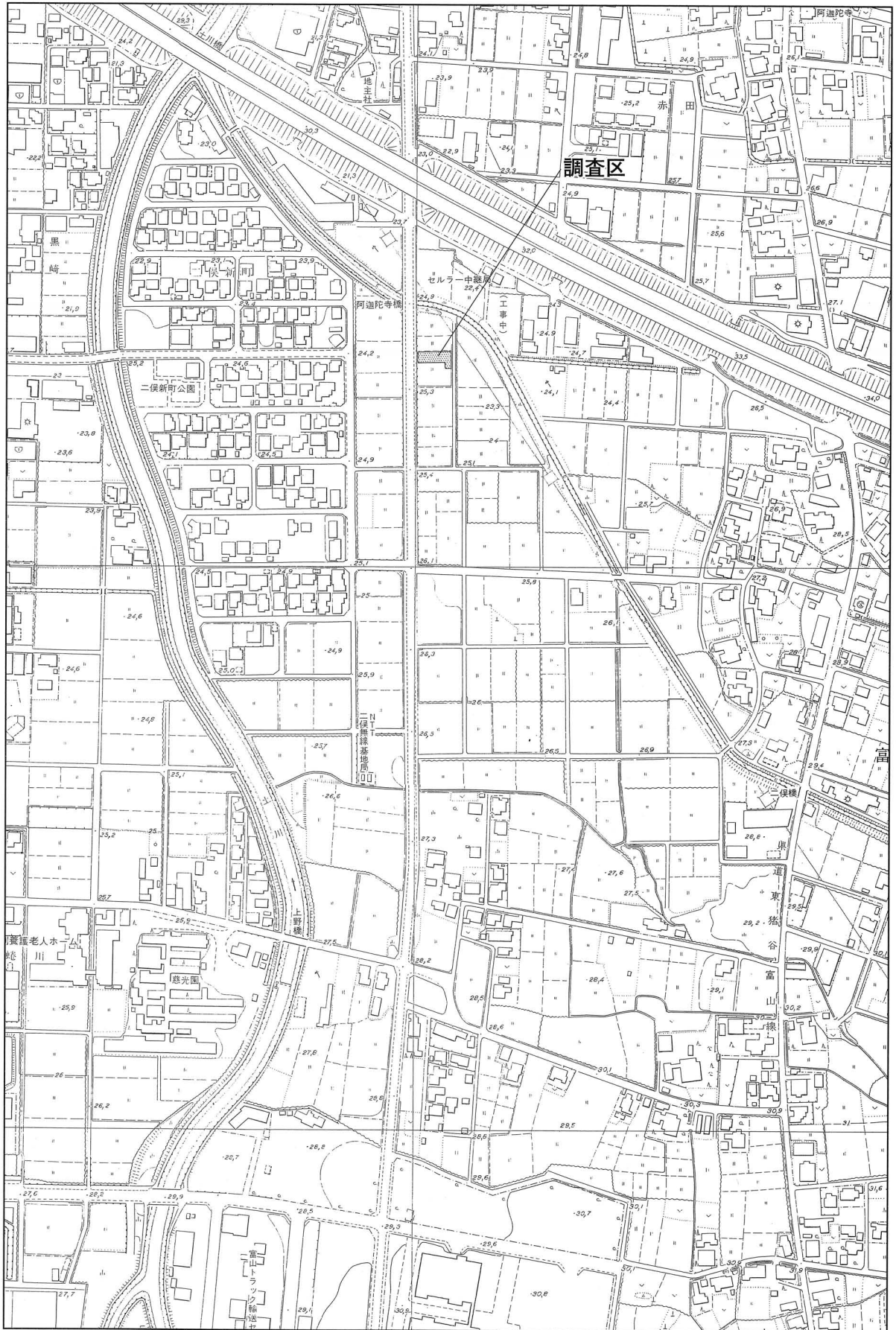
本遺跡周辺の主な遺跡で、縄文時代の遺跡としては、南約2.5kmの神通川・熊野川の複合河岸段丘である大沢野段丘上に、中期後葉の串田新式期に属する伊豆宮Ⅱ遺跡が位置する。晩期に至ると遺跡は扇状地上に立地するようになるが、その大半が段丘に程近い高位部分に占地しており、任海宮田遺跡(43)、悪王寺遺跡(9)、栗山A遺跡、大利屋敷遺跡等が知られている。

弥生時代では、後期の資料が得られた黒瀬大屋遺跡(37)が確認される。

古墳時代になると、扇頂部付近において墓域の形成が見られ、代表的な遺跡として福居古墳・伊豆宮古墳等があげられる。伊豆宮古墳は、7世紀前葉の変形八角形墳で、河原石積みの横穴式石室内からは須恵器をはじめとした馬具・刀子・紡錘車等が出土している。また、すでに消滅している福居古墳から出土したと伝えられる須恵器は、5世紀代のものとされるが、出土状況等詳らかではない。

奈良・平安時代に至ると、遺跡数は急増する。特に熊野川・土川流域に多く分布する傾向が窺われ、奈良時代末から平安時代を主体とした集落が確認される。文字資料の出土も多く、任海宮田遺跡からは『城長』・『観音寺』・『寺』の墨書土器が出土し、付近に古代寺院の存在が示唆されている。

中世では、主に掘立柱建物跡を中心とした集落が上新保遺跡(23)、吉倉A・B遺跡、南中田D遺跡等から検出され、これらの大半は律令期の集落に重複して立地する傾向にある。なお、本遺跡とさほど距離を隔てない蜷川周辺は、荘園としての太田荘に比定される。太田の地名の初見は、建保3年(1215年)であり、蜷川の曹洞宗最勝寺は、室町幕府政所代蜷川氏の由緒を今日に伝えている。



第3図 調査区の位置と周辺の地形（1：5,000）富山市基本図を縮小使用

Ⅲ 調査の方法と経過

調査の方法 遺跡地は、既に市教育委員会により確認調査が実施されており、遺構確認面までの深度・遺構及び遺物包含層の有無が詳細に把握されていた。したがって本調査はこの成果を踏まえて実施された。

調査にあたっては、重機を使用して、第1・2層まで慎重に除去した。第3層は、黒色の遺物包含層で、人力により掘り下げ、遺構確認面である第4層に達した後、遺構検出作業を行い水準点と公共座標を設定した。遺構の掘り下げは、遺構確認作業終了後、テストピットにより土層を把握してから着手した。住居跡は、カマドを通る軸線を基準に土層観察用のベルトを十字に残し、また、土坑は半截して充填土の記録と可能な限り個別に遺物の取り上げに努めた。カマドは、住居跡と同様に4分割にて掘り下げ、最終段階で構築状況の記録を取った。掘立柱建物跡及び小ピットは、柱痕を確認し、2分割して観察を行った。

遺構の測量は、国家座標を用いて、調査区に5m×5mの方眼を被せて基準とした。グリッドの呼称は北西角を基準として南北方向にアルファベットを、東西方向に算用数字を付した。実測図は1/20を基本とし、カマドは1/10で対応した。堆積土の色調は、『新版標準土色帖』に依った。

写真撮影は、常時白黒35mm・カラースライド35mm・白黒6×7判を使用して各調査段階を記録し、最終段階で調査区全体の空撮を実施した。

なお、発掘調査から整理調査においては一貫して下記の略号を用いている。

上野井田遺跡…UNI 住居跡…SI 掘立柱建物跡…SB 溝…SD 土坑…SK 小ピット…P

調査の経過 本調査は、平成10年4月12日から同年4月27日までの間実施した。調査経過の概略は以下の通りである。

4月12日 表土除去に着手し、発掘調査を開始する。

13日 表土除去を終了し、包含層の掘り下げに取りかかる。

14日 座標杭及び水準点を設置する。

16日 包含層掘り下げの終了を受けて、遺構確認を行い、遺構調査を住居跡・溝より開始する。

23日 富山市立蜷川小学校生徒約150名が遺跡見学を行う。

24日 遺構調査を終え、ラジコンヘリを使用して空撮を実施する。

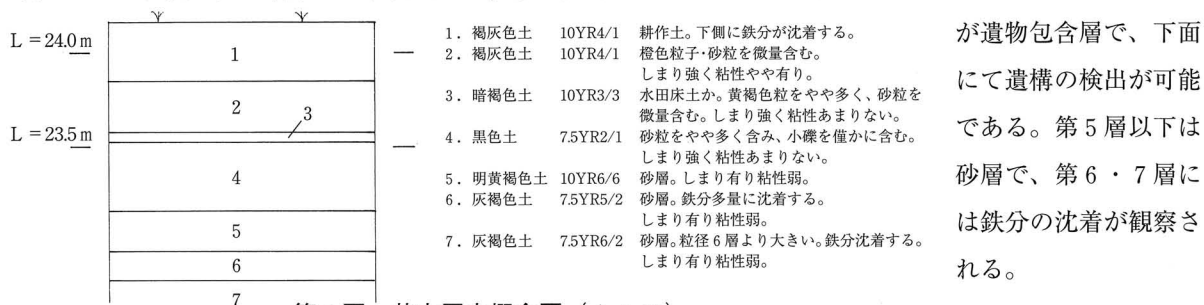
27日 富山市教育委員会より終了確認を受け、器材等を撤収し、現場における調査を無事終了する。



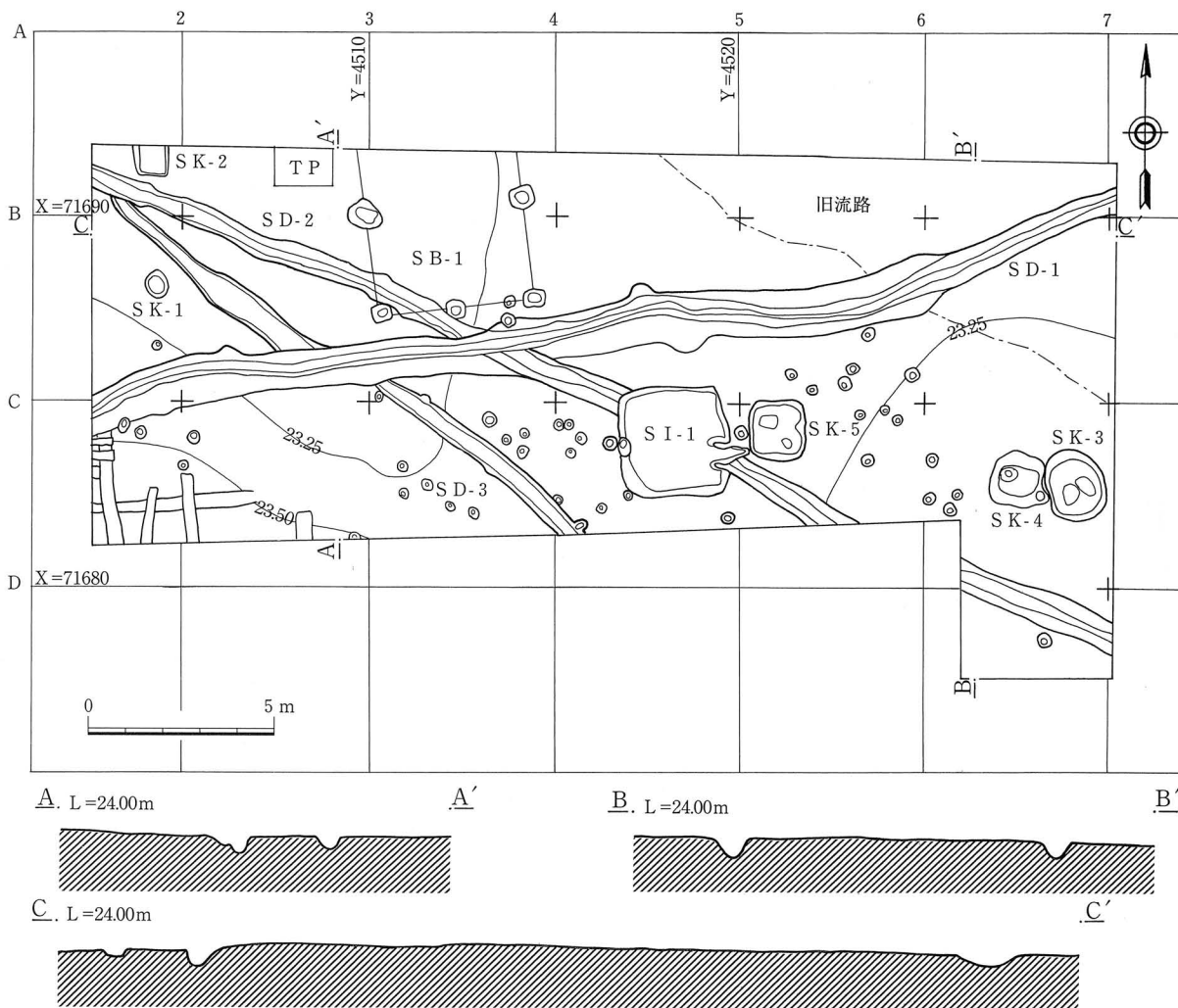
蜷川小学校遺跡見学

Ⅳ 基本層序

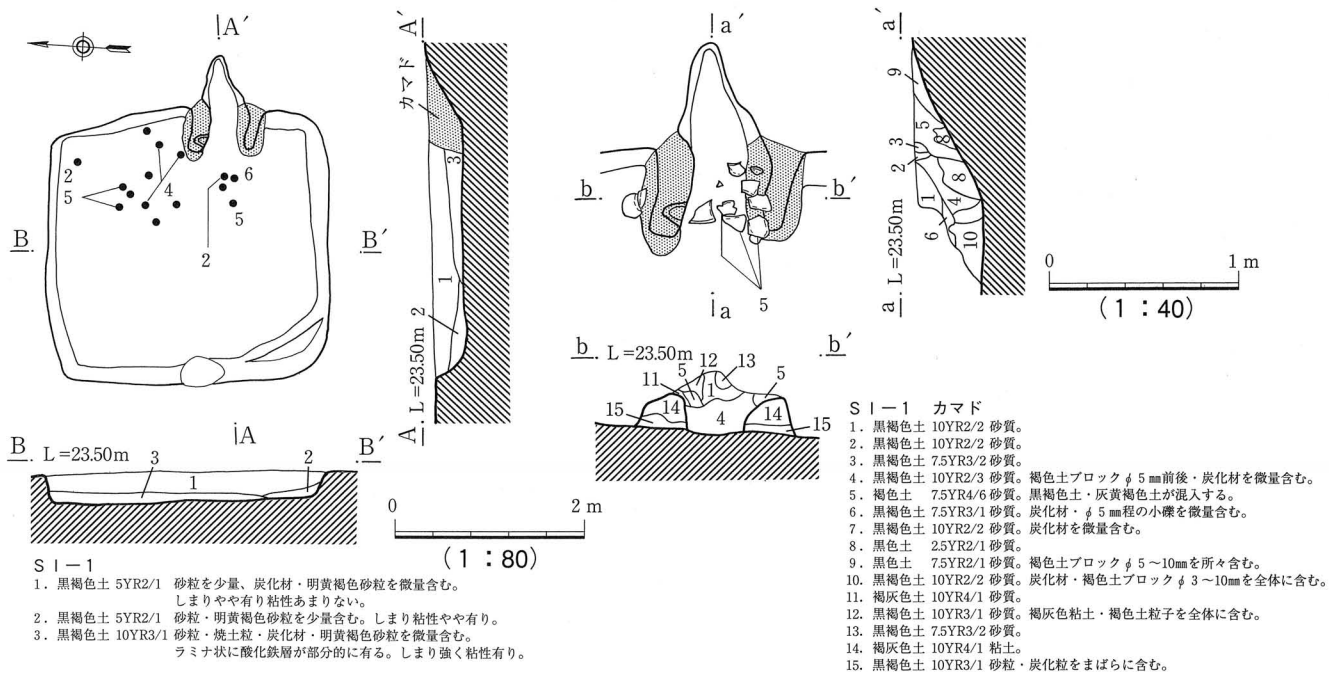
本調査区は、上野井田遺跡の北東端に位置し、二俣川が調査地の東側を北西へ向け流れている。調査区の標高は23.5m前後で、二俣川に向け僅かながら傾斜が見られ、北東側には礫層が広がり、二俣川の旧流路と捉えられた。調査区の層序は、北西側にて観察・記録したものである。第1・3層は、水田耕作土。第4層



第4図 基本層序概念図 (1:40)



第5図 調査区全体図 (1:200)



第6図 SI-1

V 遺構と遺物

今回調査が実施されたのは、二俣川の南岸より南へ約40mの地点に位置する340㎡の範囲である。検出された遺構は、住居跡1軒・掘立柱建物跡1棟・溝3条・土坑5基・小ピット・畠跡で、遺物は、奈良・平安時代を主体に少量ではあるが縄文時代・中世・近世の資料が得られている。

A 遺構

住居跡

検出された住居跡は1軒で、南西から北東へかけてほんの僅かではあるが傾斜する微傾斜地に立地している。SD-2と重複し、新旧関係では本跡が新しい構築である。SB-1とは約5m程の距離を持ち、SK-5と近接する。また、住居跡の主軸は、SD-1の走行方向とほぼ同一である。

S1-1 (第6図、図版2) 本住居跡は、C-4グリッドに位置し、調査区の南側に偏在して存在する。標高は23.2m前後で基本堆積土層第5層の砂質土層中に構築されている。覆土は黒褐色土の堆積が3層確認され、いずれも砂粒の含有が認められる。また、1・3層中には炭化材を含み、特に3層中には、冠水によるものであろうか酸化鉄層がラミナ状に見られる。規模は、東西2.85m、南北2.95m、壁高は35cm程で、平面形態は方形である。カマドを基準とした主軸はN-87°-E方向を示す。壁は約80°前後の角度で立ち上がり、床面は、砂質土壌中の構築の為、硬化面などの明瞭な痕跡は確認されなかった。ピットは、検出されていない。カマドの対面、住居跡西壁中程にピットが存在し、入口施設に伴うものかとも考えたが、住居跡周辺に穿たれている小ピットと覆土を同じくするなど本遺構には伴わないと判断した。カマドは、住居跡東壁の南寄りに付設され、主軸方向は住居と同一である。天井部は残存せず、袖は砂粒・炭化粒を含んだ黒褐色土を土台に粘土を用い構築する。煙道部は壁外へかけて削り込み約30°前後の角度で立ち上がる。燃焼部には火床面などの明瞭な被熱の痕跡は検出されなかった。遺物は、カマド内及びその周辺の覆土中層から下層へかけて集中し、土師器甕の出土が目立っている。この他、土師器の盤、須恵器の甕片が見られる。

掘立柱建物跡

検出された掘立柱建物跡は調査区外へと延びており、したがって遺構全域の調査は実施できず、全容については不明である。また、柱痕は明瞭ではなく、柱位置を正確におさえることが困難で、この為柱間寸法は基本的に1尺0.3mとした尺単位でおさえ記載した。

SB-1 (第7図、図版2) 本建物跡は調査区北部分のA-3・B-3グリッドにまたがって位置し、SD-1に南妻柱列を揃える梁行2間(4.2m・14尺)・桁行不明の南北棟建物を想定した。また、建物のP1とP5を結んだ線上の中程に浅い落ち込みが確認される。柱穴とならないまでも束柱の痕跡を考慮して調査に望んだが、覆土の状況及び形状より遺構には伴わないものと判断した。したがって本遺構は、南北に桁行を持つ側柱式の建物と考えて大過ないものと思われる。妻柱列は83°東偏する。柱穴よりは柱痕は捉えきれず、柱の「アタリ」と呼ばれる硬化部も確認されないが、柱間寸法を尺単位で図上復元すると心々で2.1m(7尺)の等間隔の数値が得られる。柱掘り方は方形を基調とするものの規則性には乏しいもので、覆土は砂粒を含んだ黒色土が単層で確認される。遺物は出土していない。

溝

3条の溝が検出され、いずれも東西方向に走り、SD-1・2・3はそれぞれ交差する。新旧関係は2➡1➡3(旧➡新)である。また、SD-1とSD-2は断面形状がV字状を呈し、規模もほぼ同一で、部分的ではあるが底面に酸化鉄の沈着が確認されることより、水路としての機能を備えていたものと考えられる。SD-1に関しては底部の比高差から、西に位置する小河川よりの取水ではなく流出であったと推測できる。

S D-1 (第7図、図版3) 調査区東端より西端へ走り約80°東偏する東西溝で、確認現長は28.4 mを測り、更に調査区外へと延びる。規模は、上端幅0.62~1.30 m、下端幅0.08~0.25 m、掘り込み深度は0.58 mで、西端と東端の基底レベルには約20cmの比高差があり、西から東へかけて僅かに傾斜する。断面形状はV字状を基本とし、一部に幅0.15~0.45 mの段を持つ。埋土は砂粒を含んだ黒褐色土と暗褐色土が確認され、底面には酸化鉄の沈着が認められる。遺物は流れ込みの縄文土器片と土師器の甕細片が出土している。

S D-2 (第7図、図版3) 調査区北東端より南西端へ走る約63°西偏する東西溝で、確認現長は31.0 mを測り、更に調査区外へと延びる。S I-1と重複し、新旧関係では本跡が古い。規模は、上端幅0.46~0.98 m、下端幅0.12~0.38 m、掘り込み深度は0.54 mを測り、西端と東端の基底レベルは4 cm前後の比高差しかなく概ね一様である。断面形状はV字状を基本とし、埋土は砂粒を含んだ黒色土が確認され、底面に部分的ではあるが酸化鉄の沈着が認められる。遺物は土師器の甕の細片と須恵器の坏片が出土している。

S D-3 (第7図、図版3) 約54°西偏する東西溝で、確認現長は15.1 mを測り、更に調査区外へと延びる。規模は、上端幅0.40~0.84 m、下端幅0.23~0.68 m、掘り込み深度は0.25 mで、基底レベルは北西端と南東端で約15cmの比高差があり、南東から北西へかけて僅かに傾斜する。断面形状は皿状を呈し、埋土は砂粒を含んだ黒色土が確認される。遺物の出土は見られない。

土坑

都合5基が検出されている。各土坑の基底面は基本層序の第5層(明黄褐色土層)中に構築されたものであり、いずれも掘り込みは浅いものであった。

S K-1 (第7図、図版4) B-1グリッドに位置し、平面形は略円形で、断面形は□である。規模は、上面径0.64×0.75 m、下面径0.39×0.49 m、掘り込みは0.21 mを測り、埋土は砂粒を含んだ黒色土・黒褐色土が確認される。遺物は土師器のロクロ甕の胴部細片が1点のみ出土している。

S K-2 (第7図、図版4) A-1グリッドに位置し、遺構は調査区外へと延びる。平面形は方形と推測され、断面形は開いた□である。規模は、上面計0.90×0.77+a m、下面計0.72×0.70+a m、掘り込みは0.22 mを測り、埋土は黒色土が単層で確認される。遺物は須恵器坏C片が出土している。

S K-3 (第7図、図版4) C-6グリッドに位置し、平面形は略円形である。断面形は皿状で長径50cmと64cmの略円形の掘り込み2基を伴う。規模は、上面径2.00×1.56 m、下面径1.58×1.32 m、掘り込みは0.15 m、最深部0.32 mを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、第2層中には焼土・炭化粒の混入が顕著である。鉄製品及び鉄滓は確認されない。遺物は土師器甕片が22点出土しているものの接合関係は認められない。

S K-4 (第7図、図版4) C-6グリッドに位置し、平面形は略方形で、長径39cmの略円形の掘り込みを伴う。断面形は開いた□である。規模は、上面計1.46×1.36 m、下面計0.74×0.98 m、掘り込みは0.36 m、最深部0.47 mを測り、埋土は砂粒を含んだ黒色土・黒褐色土が確認される。遺物は出土していない。

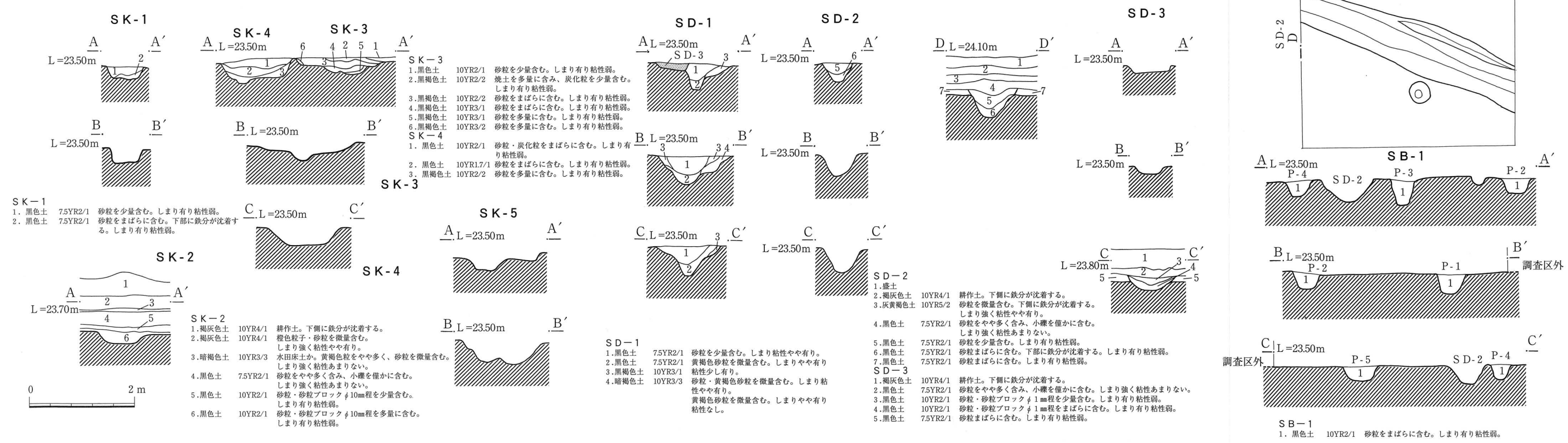
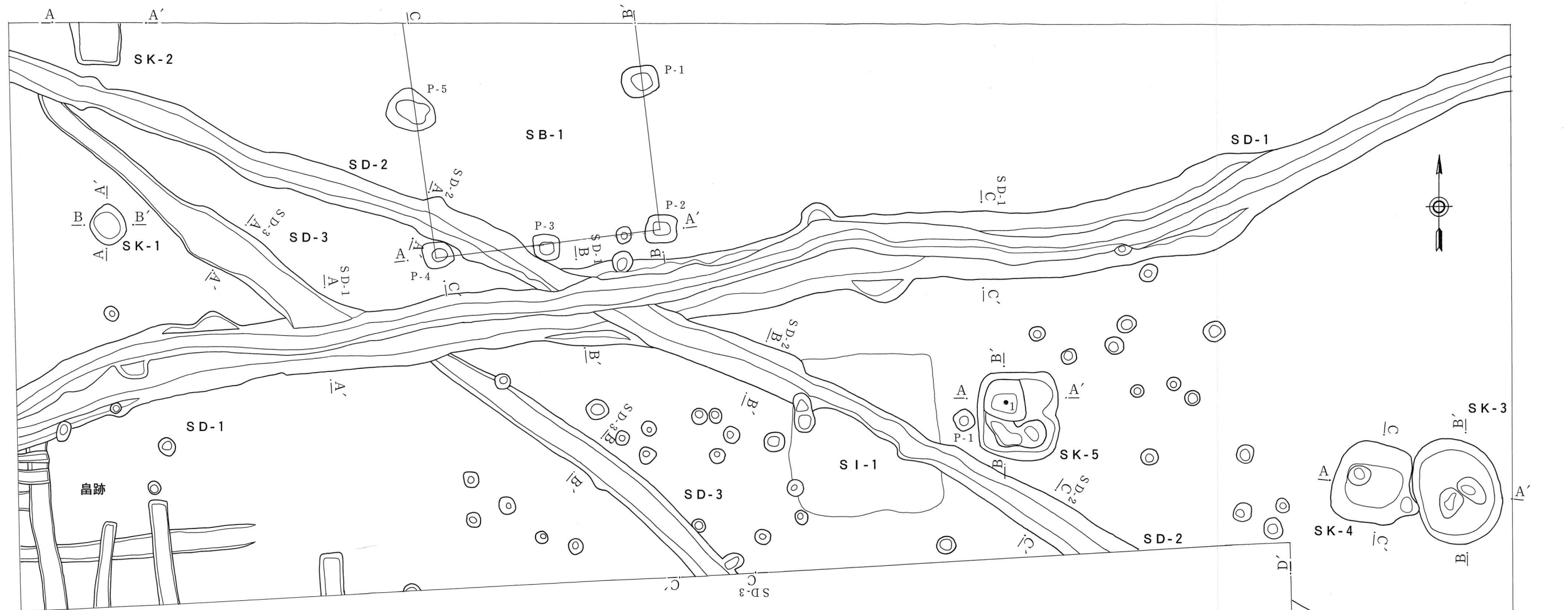
S K-5 (第7図、図版4) C-5グリッドに位置し、平面形は略方形で、底面は凹凸が激しい。規模は、上面計1.48×1.61 m、下面計1.30×1.32 m、最深の掘り込みは0.20 mを測る。埋土は黒褐色土を基調とし、炭化粒の含有が確認される。遺物は土師器の甕、須恵器の坏A・B、蓋の破片が出土している。

小ピット

47基が検出されており、調査区の南部分に偏在して分布する。底面はいずれもU字状あるいは平坦であり、先端が尖った杭状物の痕跡は認められない。規模は、長径25~40cm、深さ9~47cmの範疇に納まる。

畝跡

調査区南西端から帯状の耕作痕が検出され畝跡と判断した。時期不明であるが近世以降の所産と見られる。



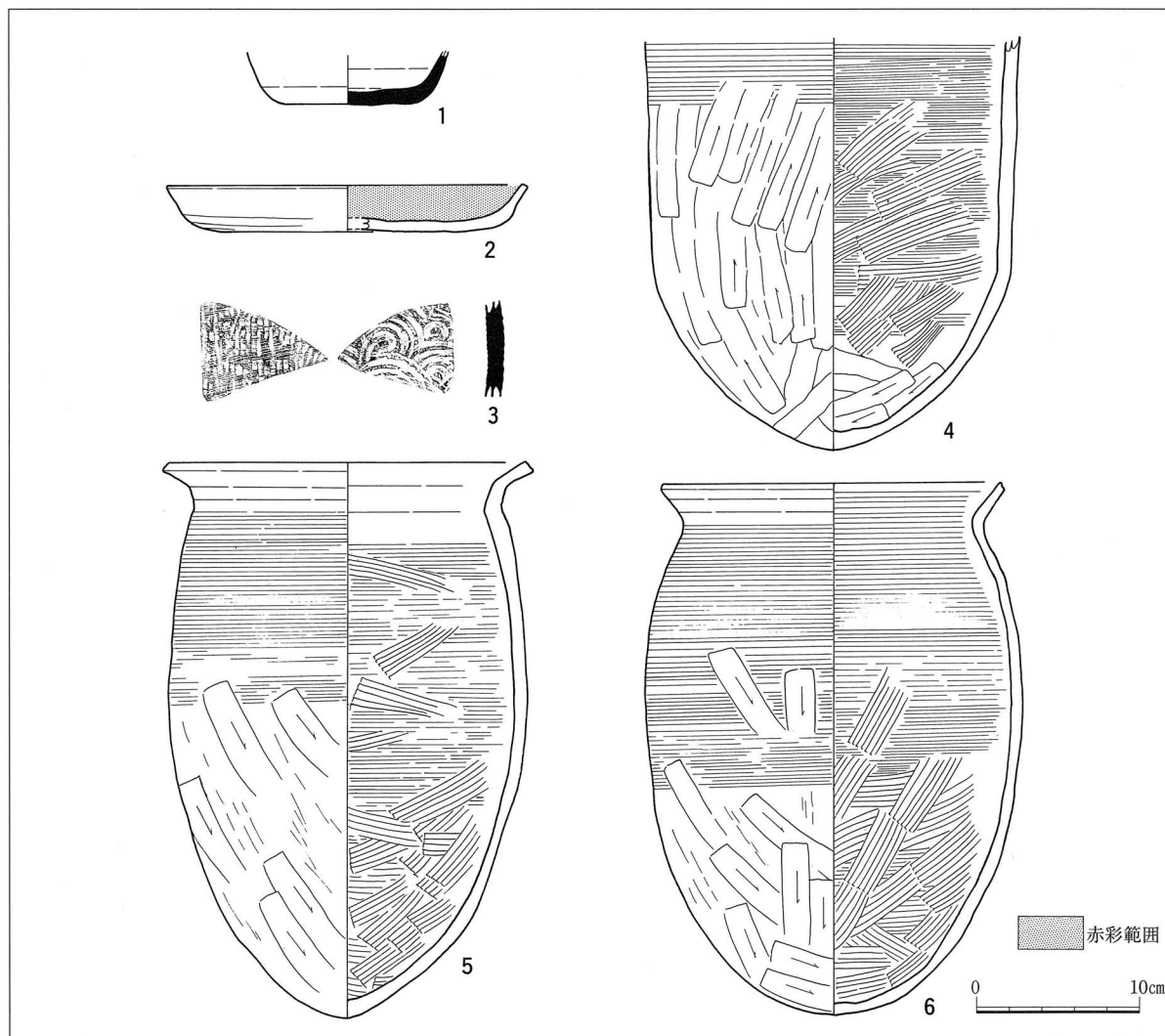
第7図 SB-1, SK-1~5, SD-1~3 (1:80)

B 遺物

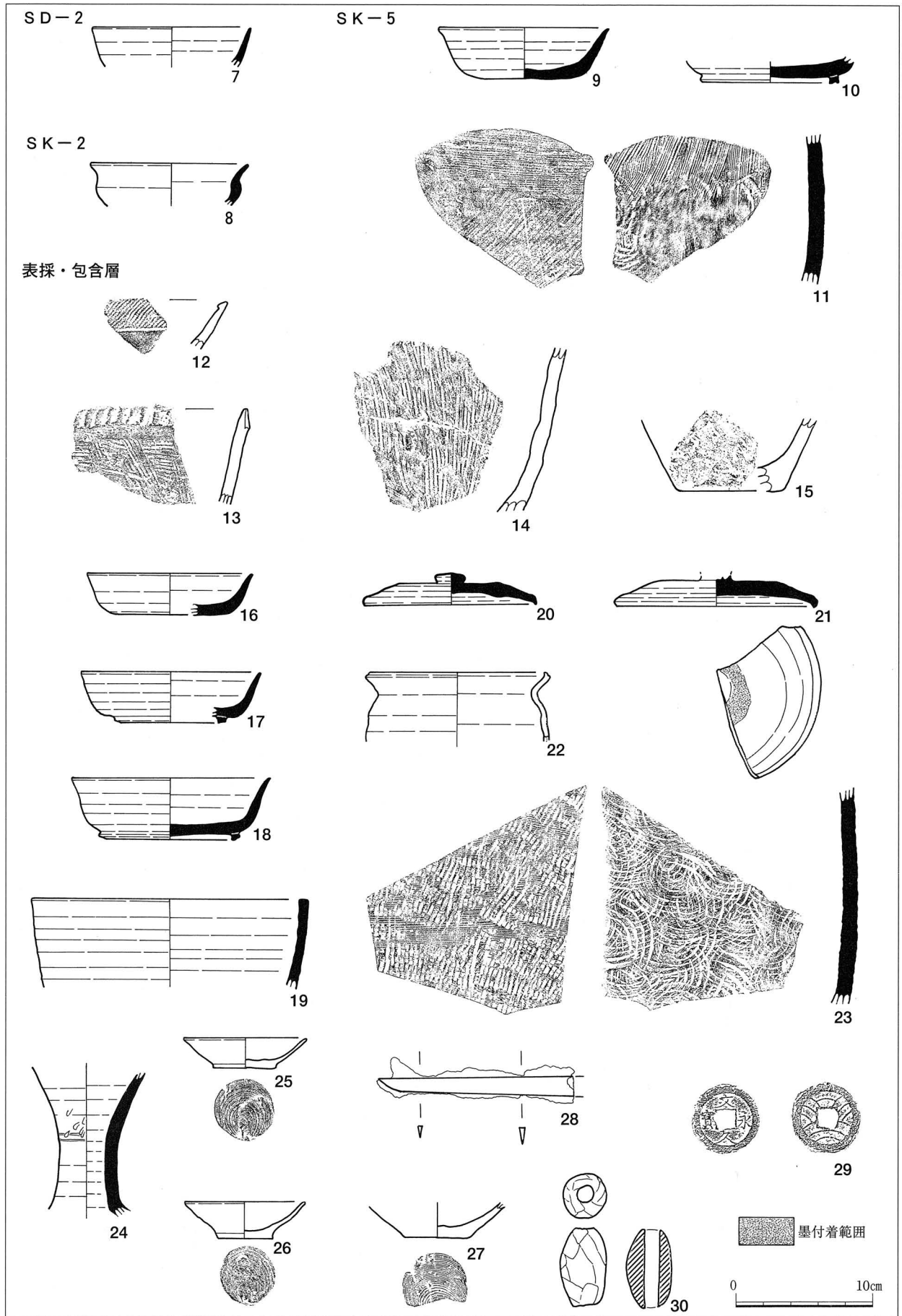
住居跡

S1-1 (第8図、図版4・5) 土師器4点(2・4~6)と須恵器2点(1・3)を掲載した。

1は坏Aで、覆土上層からの出土である。復元底径9.5cmを計り、切り離しは回転篋切りで、色調は灰白色を呈する。焼成は未還元である。2は無台盤で、器高2.9cm・復元口径22.0cm・復元底径19.0cmを計る。内面に赤彩が施され、刷毛塗りの痕跡を残す。外面は磨きで、内面赤彩時に付着したと見られる痕跡が一部に確認される。色調は外面がにぶい黄橙色、内面は赤褐色を呈し、焼成は良好である。3は甕の胴部片で、覆土上層からの出土である。内面は同心円文の当て具痕が確認され、外面は平行叩きの後、カキ目調整を施す。色調は灰色で、焼成は還元堅緻である。4は甕の下半で、覆土中層からの出土である。内面はカキ目の後、刷毛目調整で、下半から底部へかけては篋削りを施す。外面は上半がカキ目、下半が縦方向を基本とした篋削りである。内外面共にタールが付着する。色調は明褐色で、焼成は良好である。5は甕で、器高32.5cm・復元口径21.0cmを計る。外面はカキ目の後、縦方向を基本とした篋削り、内面はカキ目の後、刷毛目調整を施し、口縁部は横位に撫る。色調は明褐色で、焼成は良好である。6は甕で、器高34.0cm・口径21.5cmを計る。外面はカキ目の後、縦方向を基本とした篋削り、内面はカキ目の後、刷毛目調整を施す。内面にタールが顕著に残り、色調は明褐色で、焼成は良好である。時期は8世紀末頃と考えられる。



第8図 S1-1 出土遺物 (1/4)



第9図 SD-2, SK-2・5, 表採・包含層出土遺物 (1/4)

溝

SD-2 (第9図、図版4) 須恵器1点(7)を掲載した。7は坏の口縁部片で底部よりの出土である。復元口径11.4cmを計り、色調は灰オリーブ色で、焼成は還元堅緻である。時期は8世紀後半頃と考えたい。

土坑

SK-2 (第9図、図版4) 須恵器1点(8)を掲載した。8は坏の口縁部片で、体部が緩やかにS字状に外反し、坏C類の形状を示す。色調は暗灰色で、焼成は還元堅緻である。時期は8世紀中葉から末と考えられる。

SK-5 (第9図、図版5) 須恵器3点(9~11)を掲載した。9は坏Aで、器高3.6cm・復元口径12.2cm・復元底径7.9cmを計り、口径指数は約29である。切り離しは回転篋切りで、胎土は砂っぽく海綿骨針を含む。色調は灰色を呈し、焼成は還元である。10は坏Bの底部片で、復元底径10.0cmを計る。高台は貼り付けで、内端接地の形状を示し、底部は回転篋切り後、ロクロ撫でを施す。色調は灰色で、焼成は還元堅緻である。11は甕の胴部片で、内面は同心円状の叩きの後、カキ目、外面にカキ目の後、刷毛目調整をそれぞれ施す。色調は灰白色で、焼成は未還元である。時期は8世紀中葉から末と見られる。

表採・包含層 (第9図、図版5)

表採により得られた資料と、包含層中の遺物を示した。包含層の遺物は基本層序第4層に包蔵されていたものである。検出された遺物のうち、縄文後期土器1点(12)、細片の為縄文晩期と推定される土器3点(13~15)、土師器1点(22)、須恵器7点(16~21・24)、土質土器3点(25~27)、金属製品2点(28・29)、土製品1点(30)を掲載した。12は包含層C-5グリッドの出土で、細片の為判断に苦慮するが、縄文後期の浅鉢の口縁部片として図化した。口唇部の内面に隆帯を施し、外面の文様は縄文施文後沈線により区画する。色調は灰白色で、焼成はあまい。13は鉢形土器の口縁部片と見られ、口唇部に櫛歯状工具を用いた刻みを施す。下方の文様は条線により構成し、内面を磨く。刻み及び条痕の技法は縄文晩期後半で確認されるが、細片の為詳細は不明である。胎土は細礫を含み、色調は褐色で、焼成は良好である。14は包含層C-5グリッドより出土した胴部下半片で、文様は条線を用いる。胎土は小礫を含み粗く、色調は褐色で、焼成はあまい。時期は13・15と同じか。15は底部片で、B-6グリッドの出土である。胎土は小礫を含み粗く、色調は褐色で、焼成はあまい。16は坏Aで、包含層C-5グリッドの出土である。器高3.6cm・復元口径12.2cm・復元底径7.9cmを計り、口径指数約29である。切り離しは回転篋切りで、体部外面はロクロ撫でを施す。色調は灰白色で、焼成は未還元である。17は坏Bで、器高4.6cm・復元口径14.5cm・復元底径9.2cmを計り、口径指数は約31である。高台は貼り付けで、底部は回転篋切り後、ロクロ撫でを施す。内面にタールが付着する。色調は灰白色で、焼成は未還元である。18は坏Bの体部から底部片で、器高3.6cm・復元口径13.2cm・復元底径7.2cmを計り、口径指数は約27である。色調は灰色で、焼成は還元堅緻である。19は鉢の口縁部片で、包含層C-5グリッドの出土である。復元口径20.2cmを計り、色調は暗灰色で、焼成は還元堅緻である。20は蓋で、包含層C-5グリッドの出土である。器高2.4cm・復元口径12.4cmを計り、つまみは円柱化する。色調は灰色で、焼成は還元堅緻である。21は蓋で、内面を利用した転用硯と見られ、内面に僅かながら墨の付着が観察される。復元口径14.4cmを計り、色調は暗灰色で、焼成は還元堅緻である。22は小型甕の口縁部片で、包含層C-5グリッドの出土である。口唇部内面に段を持ち、内外面にタールが付着する。復元口径12.9cmを計り、色調は褐灰色で、焼成は良好である。23は甕の胴部片で、C-5グリッドの出土である。内面には同心円文の当具痕が残り、外面は平行叩きの後、カキ目調整を施す。色調は暗灰色で、焼成は還元堅緻である。24は長頸壺の頸部片で、外面中程に2条の沈線が巡る。色調は暗灰色で、焼成は還元堅緻である。

25は小皿で、B-3グリッドの出土である。器高2.8cm・復元口径9.0cm・底径4.0cmを計る。切り離しは回転糸切りで、体部にロクロ撫でを施す。色調は灰白色で、焼成は良好である。26は小皿で、B-3グリッドの出土である。器高2.2cm・口径9.0cm・底径4.5cmを計る。切り離しは回転糸切りで、体部にロクロ撫でを施す。色調は明褐色で、焼成は良好である。27は小皿の底部片で、B-3グリッドの出土である。底径4.9cmを計り、切り離しは回転糸切りで、体部にロクロ撫でを施す。内外面にタールが付着し、特に内面は顕著である。色調は褐色で、焼成は良好である。28は刀子の刃部片で、残存長14.1cm・最大幅1.5cm・厚0.5cmを計る。29は表採資料の文久永寶で、直径2.5cmを計る。30は管状の土錘で、C-5グリッドの出土である。長5.6cm、最大口径3.2cmを計り、成整形は篋削りの後雑な撫でを施す。色調は褐色で、焼成は良好である。時期は16～19・22・23が8世紀後半から末、20・21が9世紀前半、25～27が12世紀後半から13世紀後半に比定される。

Ⅵ まとめ

上野井田遺跡は、土川と二俣川に挟まれた約12万㎡に及ぶ遺跡で、調査は遺跡の北東部、二俣川に程近い340㎡を対象として実施された。この結果、住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、溝3条、土坑5基、小ピット群、畠跡が検出され、調査区の北から南東にかけては礫層が広がり、二俣川などの旧流路と想定された。

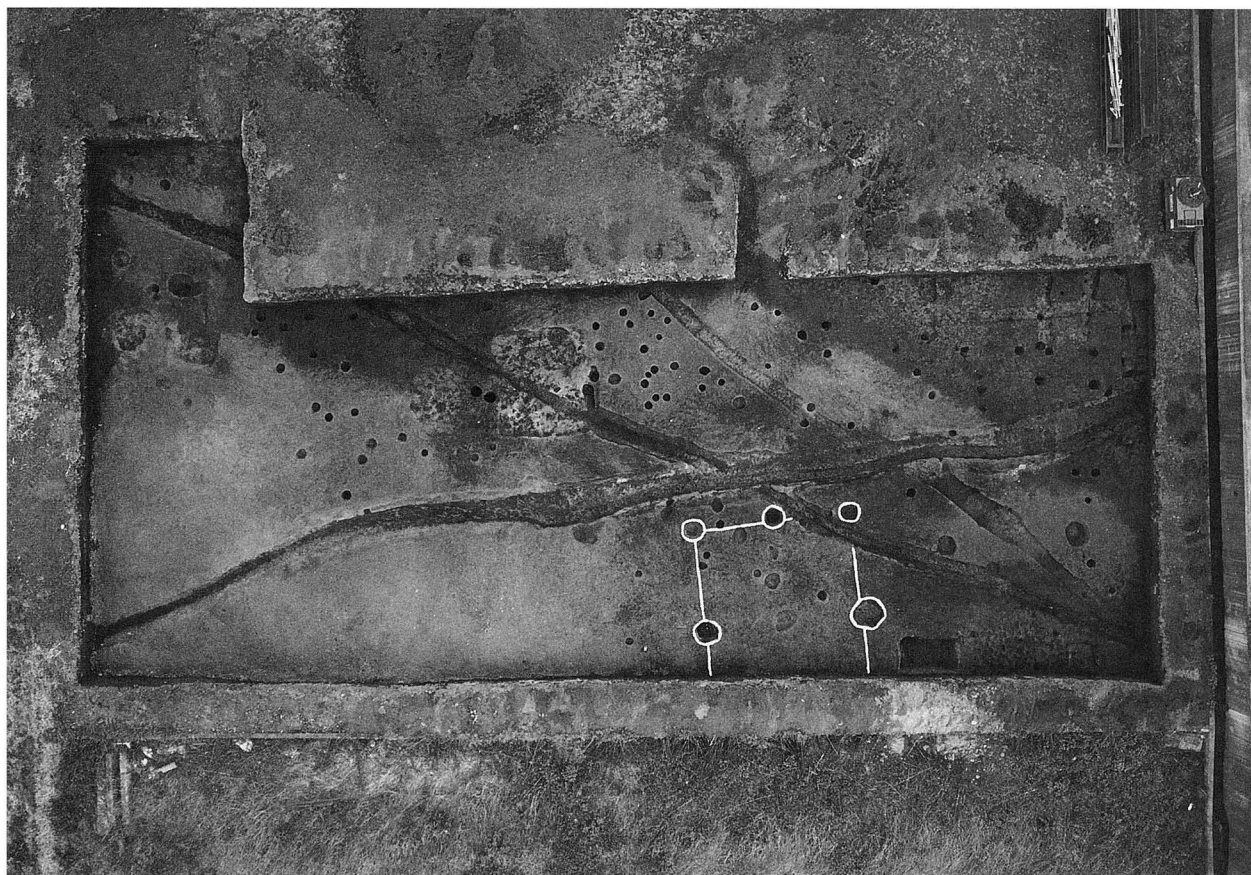
富山市の大部分を占める扇状地上においては、比較的平坦に見えるものの、小河川の発達があり、これらの小河川に添って南北に長い微高地が形成されている。本調査区においても、南西方向へ向け僅かながら傾斜が捉えられ、南西側は微高地状となり、上野井田遺跡の大部分は微高地上に立地すると想定される。現在の二俣川は護岸工事が施されて用水化し、旧状は窺い知ることはできないが、小河川が遺跡の西を北流していたことは明らかで、遺跡は小河川に面して形成された奈良・平安時代を主体とした集落跡であると言える。

各遺構の時期については、S I-1が、土師器の甕及び内面赤彩が施された盤から8世紀末の年代が与えられ、SK-1・2・3・5も出土遺物からほぼ同年代に機能したものと考えられる。SB-1とSK-4については遺物の出土が見られない為、断定はできないものの、覆土の状態から察して奈良・平安時代の範疇と考えて大過ないものと思われる。溝はSD-2がS I-1との重複関係によりS I-1に先行するものの、出土遺物から時期的に極めて近接することが判明した。これらの新旧関係を整理すると、SD-2→S I-1→SD-1→SD-3（旧→新）となり、この他近世以降の所産と見られる畠跡を除いた各遺構も、出土遺物及び覆土の状況からS I-1と前後する時期に帰属すると想定される。

遺物については、縄文土器・8世紀後半から9世紀前半、12世紀後半から13世紀後半、近世と多期にわたっている。全体に遺物の総量が少ない為、何とも言えないが、特に遺構の検出されている8世紀後半から9世紀へかけての遺物を見ると、少ないながら須恵器は供膳形態と貯蔵形態に、土師器は煮沸形態に機能の分化が見られる。ただ1点だけ赤彩土器の盤が出土しており、土師器ではこれが唯一の供膳形態となっている。また、この時期の遺物を観察し気づくことは、須恵器の中で、特に供膳形態に未還元の商品が多数含まれていることで、破片総数53点のうち23点（43%）がいわゆる焼成不良の土器群となっている。周辺地域における同時期の遺跡でもこの傾向は確認されており、このことについて関清氏は、『七美・太閤山・高岡線内遺跡群発掘調査概要(5)黒河尺目遺跡』の中において、9世紀後半以降一般化するロクロ土師器が須恵器にとって変わるという当地方の状況を踏まえれば、焼成不良品の存在はロクロ土師器に先行する先駆的あるいは萌芽的な土器群の可能性を述べている。今回の調査からは、ロクロ土師器に先行する土器として『焼き分け』などの行為によるものか否かは判断できないが、本遺跡において8世紀後半から9世紀へかけての須恵器の過半数近くが未還元であることは指摘しておきたい。



1. 調査区全景（北西より）

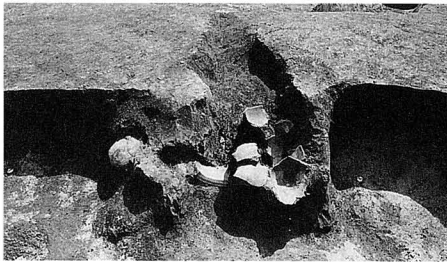


2. 調査区全景（空撮）

図版 2



1. S1-1 全景 (西より)



3. 同 カマド内遺物出土状況 (西より)



2. 同 遺物出土状況 (西より)



4. 同 カマド構築状況 (西より)



5. 同 カマド袖断面 (西より)



6. SB-1 全景 (南より)



1. SD-1 全景 (北東より)



2. SD-2 全景 (南東より)



3. SD-1~3 全景 (北西より)



4. SD-1 A土層断面 (西より)

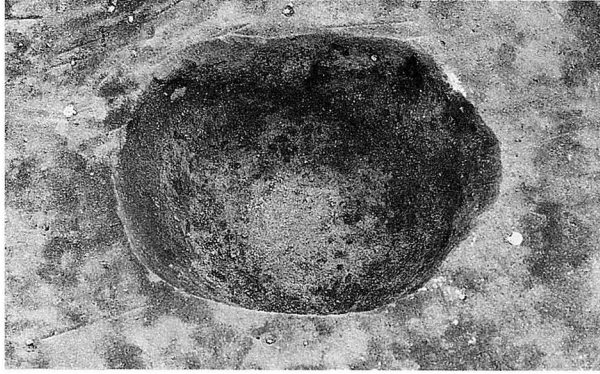


5. 同 C土層断面 (西より)



6. SD-3 C土層断面 (北西より)

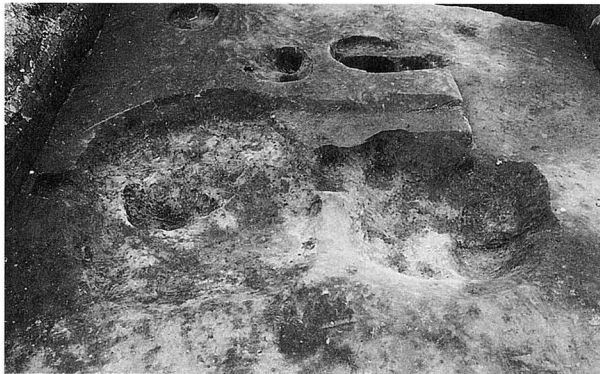
図版 4



1. SK-1 全景 (東より)



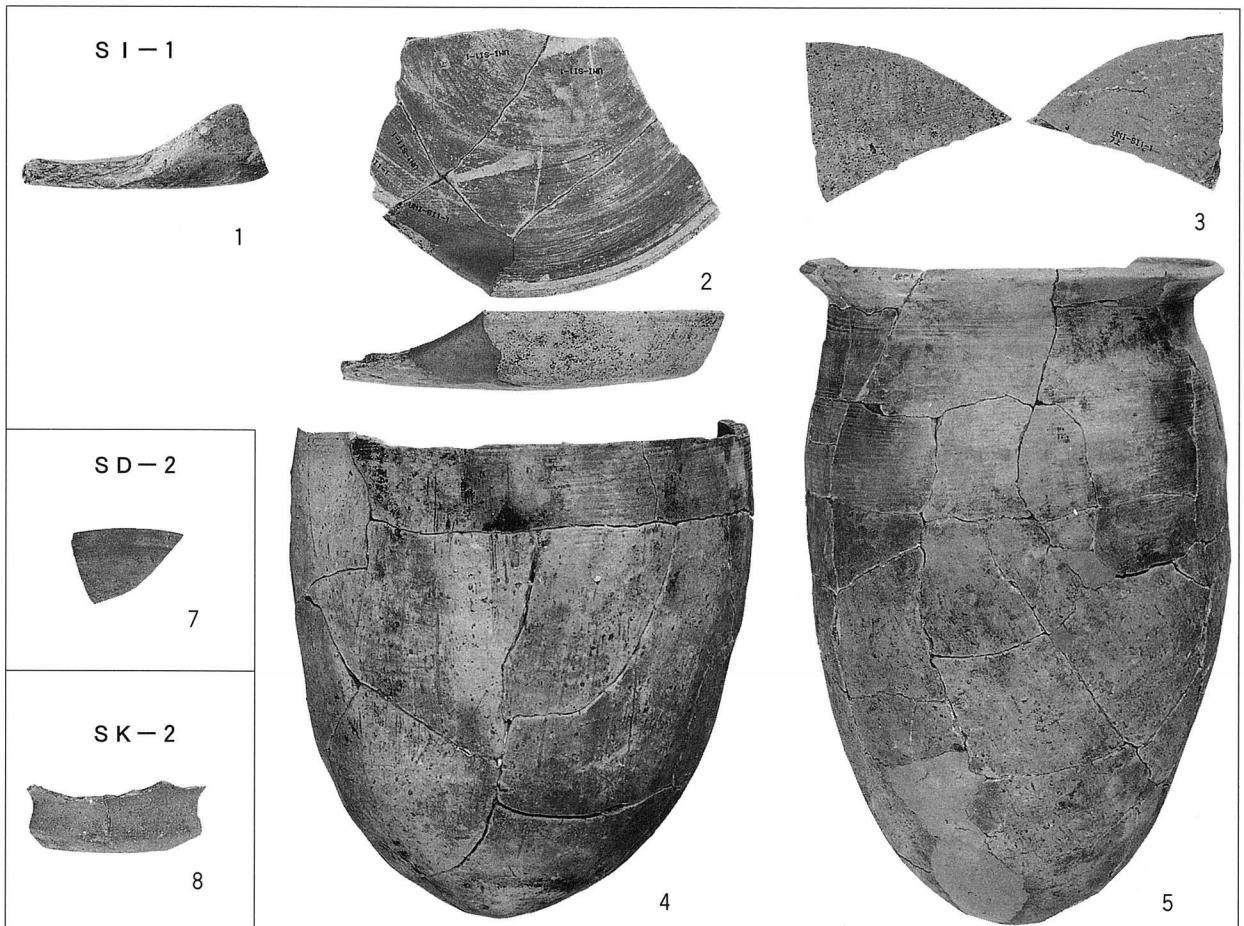
2. SK-2 全景 (南より)



3. SK-3・4 全景 (北より)

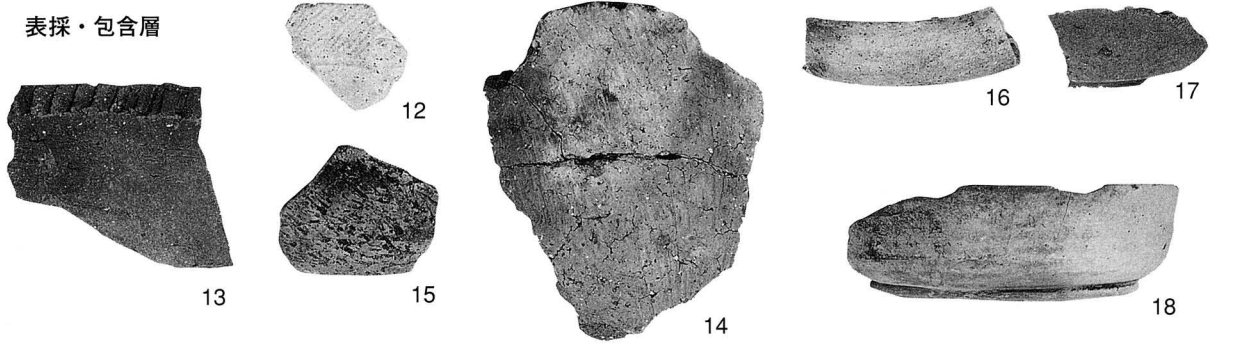


4. SK-5 遺物出土状況 (東より)

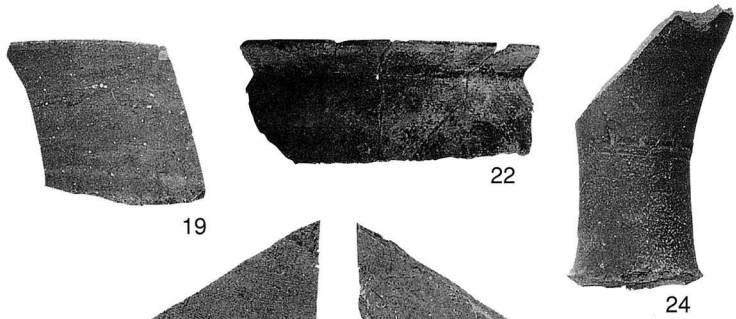
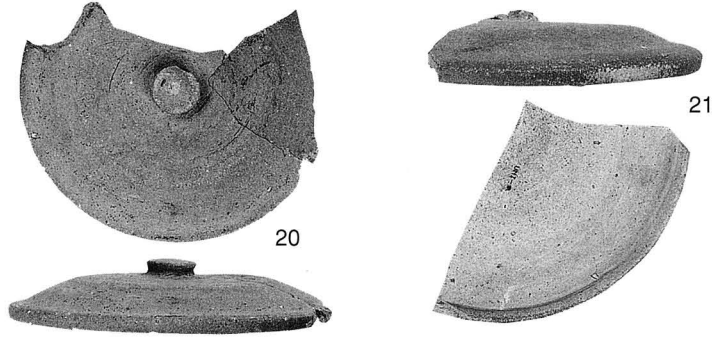


SI-1, SD-2, SK-2 出土遺物

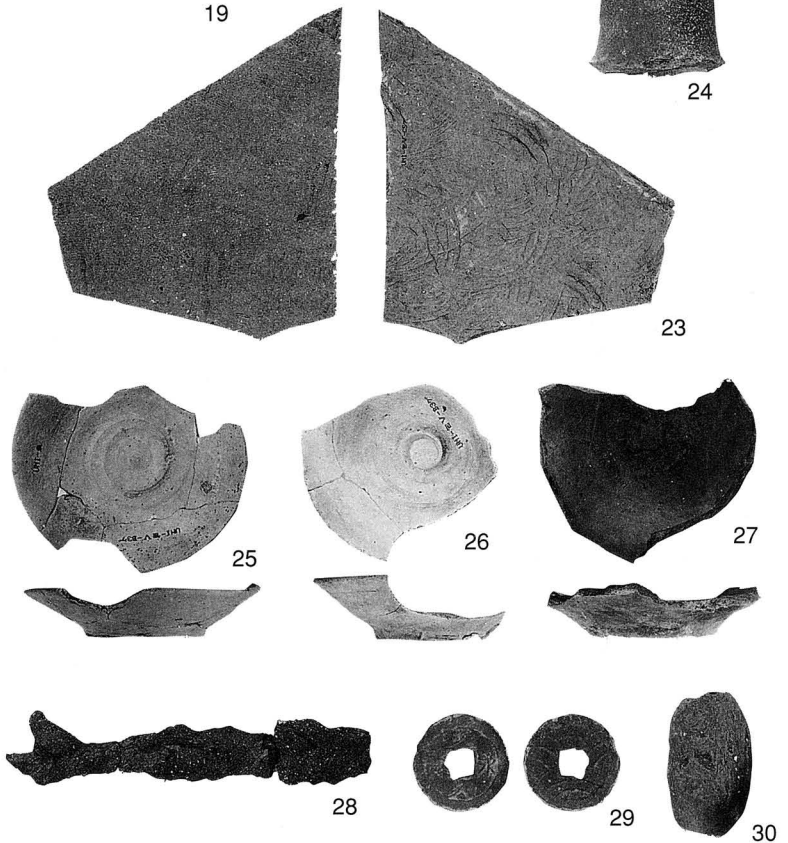
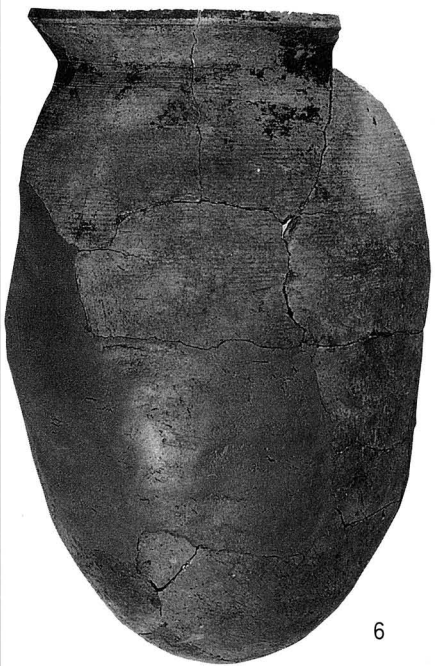
表採・包含層



SK-5



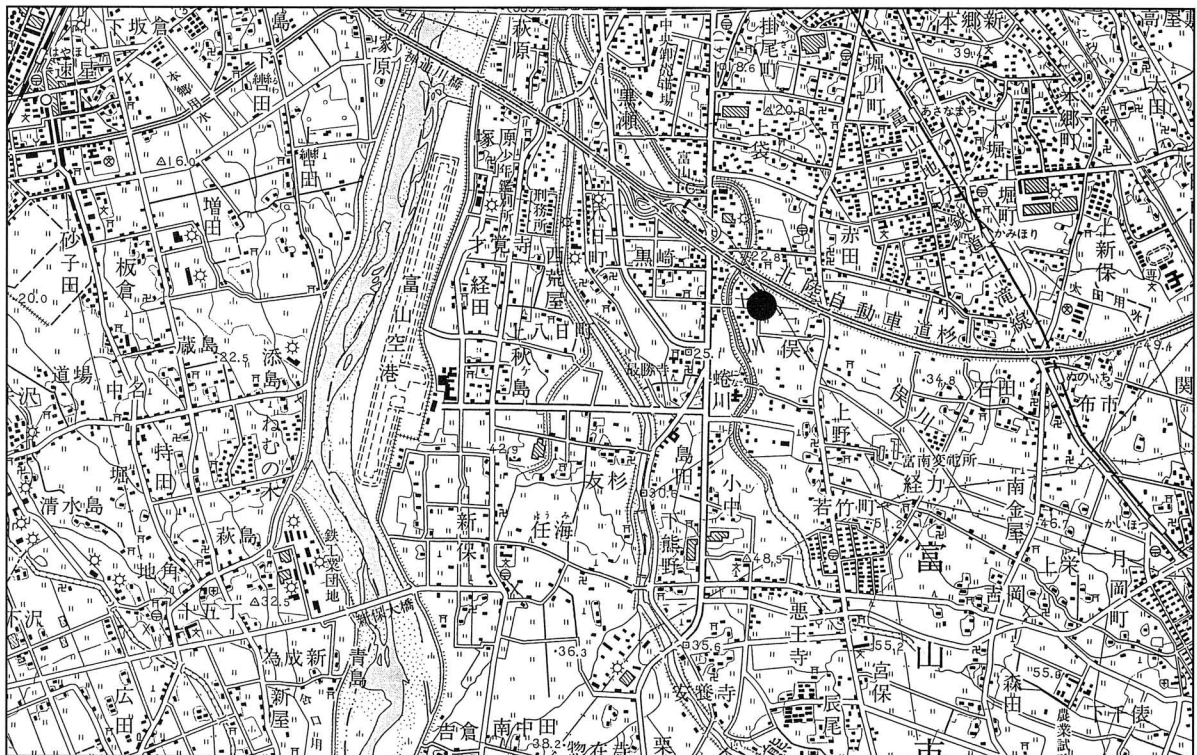
SI-1



SI-1, SK-5, 表採・包含層出土遺物

抄 録

フリガナ	ウワノイダイセキ							
書名	上野井田遺跡							
副書名	病院施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	間宮正光							
編集機関	山武考古学研究所／〒286-0045 千葉県成田市並木町221 ☎0476-24-0536							
発行機関	富山市教育委員会／〒930-0005 富山県富山市新桜町7-38 ☎0764-43-2138							
発行年月日	西暦1998年7月31日							
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ウワノイダイセキ 上野井田遺跡	トヤマケントヤマシフクマク 富山県富山市二俣 406番-1	16201 ^⑨	513 (市番号)	36°38'46"26	137°13'02"00	19980412 ～ 19980427	340㎡	病院施設建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上野井田遺跡	集落跡	奈良・平安時代	住居跡 1軒 掘立柱建物跡 1棟 溝 3条 土坑 5基 小ピット 47基 畠 1ヶ所	縄文土器：浅鉢 土師器：無台盤・甕 須恵器：坏A・坏B・蓋・長頸壺・甕 土製品：錘 土師質土器：小皿 その他：刀子・古銭（文久永寶）			調査区の東には、礫層が広がっており、二俣川の旧流路と捉えられた。このことから遺跡は、旧流路跡に面して形成された奈良・平安時代を主体とした集落跡と考えられる。	



抄録図 遺跡の位置（国土地理院作製5万分の1『八尾』）

病院施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富山県富山市 上野井田遺跡

印刷 平成10年7月21日

発行 平成10年7月31日

編集 山武考古学研究所

発行 富山市教育委員会

印刷 (株)文化総合企画

千葉県印旛郡富里町日吉台1-23-12

☎ (0476) 93-0593

